

希望と感謝の気持ち忘れず歩む

Never Forgetting Hope and Gratitude

本田 夏希 21歳 大学3年(福島県、桑折町出身)

古里の桑折町は東日本大震災から10年の月日を経て、桑折駅前団地への入居開始、復興支援道路としての相馬福島道路の一部開通など、復興に向けて一歩ずつ前進しています。また、風評被害を乗り越え、「献上桃の郷」として上質な桃が生産されています。ここまで前進できたのは、桑折町民の負けない心と町内外の多くの方々からの温かい励ましがあるからです。復興に向けて前進するとともに、震災以前よりも活気あふれる桑折町となるように、希望と思いやり、感謝の気持ちを忘れずに歩み続けていきます。

できることを頑張っていく

Doing What I Can

長谷川 早代 61歳 主婦(柳津町)

東日本大震災から10年の月日は本当に早かったと思います。私の住んでいる会津地方は震災による物理的被害は少なかったものの、風評被害という先の見えない被害がずっと続いておりました。観光は打撃を受けとても辛い状態でした。その反面、今まで福島県に関心を持てることがなかった方々からいろいろな献物的な支援があることなどの情報を耳にするたびに、それぞれの立場でできることに力を尽していたに何ができるのかを考えたから、今できることを頑張ろうと思い過ごしてきました。復興大使の方々と交流があればできる限り参加し、情報交換をしたり、メールのやり取りをさせていただいたりしております。そのたびに元気を頂いております。今回の新型コロナウイルスとの闘いにも何か共通するものを感じます。復興大使で縁があった方にマスクを送りました。感謝の便りを頂き福島民報に投稿していただきました。こんなささいなことでも喜んでいただけたという出来事もありました。これからもできることを頑張って活動、発信していきたいと思います。

支援のおかげで少しずつ前進

Moving Forward Gradually Thanks to the Support We've Been Given

花里 莉子 20歳 大学2年(西郷村)

私の実家のある地域では、4年前に小・中学校が再開されました。周辺の地域の学校が一つの場所に集まるという形ですが、子どもたちが自分の育った地域の学校に通って、そこで友達とずっと一緒に学ぶことができるということは、とてもうれしいことだと思います。このように少しずつ前に進むことができたのは、福島の人々の頑張りとそれを支えてくださった県外や外国の方々のご協力があったからだと思います。多くの温かいご支援に感謝しつつ、これからも福島の人々の復興のために私自身も頑張っていきたいと思っています。

助産師になって復興に貢献

Becoming a Midwife and Contributing to Reconstruction

近藤 瑠璃 16歳 高校1年(楢岡町)

東日本大震災発生当時、幼稚園生だった私は高校1年生になりました。震災で専門学校が中断中、赤ちゃんが取り上げられるニュースが映し出され、「福島の子供の未来の希望」と話題になっているのを見て、助産師になりたいという夢を持つようになりました。私は今、その夢をかなえるために自宅から20分以内離れた高校に通い勉強に励んでいます。将来夢をかなえようとする皆さんの支援に感謝し、今度は自分が古里の復興に貢献できるように頑張っていきたいと思っています。

経験を世界の人に伝えたい

Wanting to Share my Experience With the World

菊地 真由子 17歳 高校2年(福島市)

東日本大震災から10年がたちとうとしている今、福島は震災前よりも発展している地域が増え、安全に対する取り組みも強化されていると思います。復興に携わってくださったボランティアの方々や海外からの支援のおかげで、当たり前のように日常がどれほど幸せなものであるかを感じることができました。私たちが震災2年生は当時の記憶がある最後の学年といわれています。将来は海外で活動し、忘れてはいけない出来事の一つとして震災で経験したことを世界中の人に伝えたいです。

子どものアイデアに明るい未来

Children Come up With an Idea That Inspires Hope for the Future

市川 敬子 46歳 主婦(田村市、白河市出身)

現在、私は東京電力福島第一原発事故で一時、避難を余儀なくされた田村市郡路町で生活しています。郡路町の生活で感じたことは、どこにも負けない古里郡路に対する強い誇り、郷土愛です。郡路小の児童が考案した「きゅりやジャム」は未来への強い期待感を抱かせるのに十分なアイデアです。PR冊子、PR動画を作り、その完成度の高さに驚いています。皆さまにお見せしたいくらいです。少子高齢化が急速に進んでいるが、明るい未来への可能性を信じて私は一緒に元気に過ごしています。

共助の心 忘れない

I'll Never Forget the Spirit of Cooperation

柴田 龍一郎 21歳 大学2年(福島市)

東日本大震災から、10年が経過しようとしている。正直、復興が進んでいるのかどうかが、私は判断することができない。この節目を伝えるに当たり、当事者意識というものを考えてみたい。「関わっている」「関わりたい」という思いが重なることが、復興という一つの目標へ向かうことができるのではないだろうか。その支援が何にも見えにくい形であっても、感謝の気持ちを持ち、誰かが困っているから自らも助ける、「共助」の心を忘れないようにしたい。

県人会の応援活動に習いたい

Wanting to Learn From Support Efforts by Prefectural Associations

本田 菜々子 18歳 高校3年(福島市)

東日本大震災から約10年が経過し被災した街はきれいに建て直され、物理的復興が進んでいる中、一部の国では福島県産の食品に対する輸入停止などの規制が続く、風評被害からの社会的復興はまだ長い道のりであるのが現状です。福島県人会の皆さまは国内だけでなく国外でも風評払拭(ふっしょく)、風化防止に向けた活動を行ってくださっています。誰でも気軽に情報を発信できるようになった今だからこそ私も福島県民としてイベントのPRなど自分ができることを積極的にやりたいです。

人のつながりの大切さ実感

Experiencing the Importance of Human Connection

青野 芽留萌 19歳 専門学校1年(福島市)

東日本大震災から10年がたちます。震災当時比べて外で活動することが多くなり、人との関わりが増える人々を見る機会も増えたように思います。風評で売れなかった農作物も最近は買われるようになり、少しずつ回復しているのを感じます。私たちが気づけてはいることでもありませんでしたが、さまざまな人の支えがあり今があると思います。人とのつながりがどれほど大切なかを改めて感じました。支援してくださった皆さまに感謝すると共にこれから福島の成長に自分が貢献出来るよう日々頑張っていきたいです。

福島の「いいね」行動したい

Wanting to Find and Share What Makes Fukushima Special

橋本 由香里 51歳 主婦(三春町)

私は身近な地域で環境美化に努める自主的な活動「ふくしま50未来プロジェクト S.DGs×おもてなし」への参加の呼び掛けに応じ、清掃活動とヒマワリの種まきを実施しました。地元の本報「南成田の大桜」を名所にしようと保全活動と観覧会を昨年初めて有志と開催しました。また、娘の所属する小野高家庭クラブが皆さまの応援のおかげで、地域の特産品を使った料理を考え競う「うまいもん甲子園」で全国大会出場を決め、準優勝を果たしました。メニューの「活気あがりバーガー」のソースには、東日本大震災発生以来の「10年」をかけた、じゅねん(エゴマ)が加えられています。今後も「日本一」のふくしまをつくる1人として「いいね」と思うことはどんどん行動していきたいと思います。

課題に向き合い福島を支えたい

I Want to Take on Challenges to Support Fukushima

菊地 鈴音 18歳 高校3年(矢吹町)

東日本大震災から10年がたちとうしていますが、福島に活気が戻ったように感じます。しかし、いまだ解決に至らない問題も存在します。私はそれらの課題に1人の福島県民としてしっかりと向き合っていきたいです。震災発生当時、小学生だった私は高校を卒業しました。進学のため一度福島を離れることになりましたが、いずか地元に戻り、福島の将来を支えていきたいです。私たちに「今」があるのは皆さまのご支援のおかげです。心から感謝申し上げます。

全ての人々にありがとう

Thank You to Everyone

根本 良子 68歳 農家民宿経営(鮎川村)

私は三つのボランティア団体に加入し、3.11の後、宮城、福島とたくさんの被災地に行き、災害の大きさを、そして恐ろしさを目にしました。たくさんの方々のボランティア活動、県警の方々、自衛隊の方々の懸命な支援を見て、日本人の郷土愛を感じました。私が民泊を始めたのは3.11の後です。県内外から「福島を応援したい」という気持ちでたくさんの方が足を運んでくださいました。そして何よりたくさんのお愛と幸せと感謝を頂きました。今私ができること、それはたくさん頂いた三つのことを一つでも多くお返しいことです。「ふくしま復興大使」を通して全ての人々に感謝します。頑張って毎日を送っている福島県民を忘れないでください。そして、ありがとうございます。

古里の農業を支える仕事をしたい

I Want a Job That Supports Fukushima's Agriculture

松浦 奈々帆 21歳 大学3年(茨城県、西郷村出身)

福島県で育てられた農産物がもう食べられないのではないかと、思った日々から、10年がたちとうとしています。今こうして、福島県の農産物を食べられることが、本当にありがたいことだと感じています。私は現在、大学で農学について学んでおり、将来は福島県の農業を支える仕事をしたいと考えています。今後は私が、今まで支援してくださった方々に恩返しができるように、そして福島県の人々と共に、さらなる復興に向けて歩んでいけるよう、努めていきます。

明るい福島へ歩んでいく

Strides Forward to a Cheerful Fukushima

田部 史哉 20歳(瀬川村)

「懐中電灯をつけてください」。一つ、また一つ、そしてまた一つといっていく。春煙にかすむ海辺の街角は、夜だというのにものすごく明るかった。机にある1枚の色あせた写真。その中の母とはおのりから互いに狐顔の中で、結ばれたかのように歩んでいた。「福島の人、大丈夫?」。1人また1人、福島を応援してくれる人が増えていった。照らされた場所もほのぼのの時の福島ではなし。これも皆さまのおかげ。あなたが声を出せば、福島の人には元気がなり、元の姿に戻りつつある。そして今日も明日もずっと明るい福島に歩んでいきます。

誰かの支えになれる人間に

Becoming a Person Who Can Help Others

柳沼 大輝 24歳 大学4年(東京都、本宮市出身)

いつも福島県への多大なご支援をありがとうございます。東日本大震災発生当時、私はまだ中学2年生でした。そんな私も10年の月日がたち24歳になりました。3・11によって私たちは学びやを失いました。しかし、皆さんの温かいご支援のおかげで学びを続けることができました。大学卒業後、私は教会の牧師になるために新たな大学に通っています。このような道に進むのも決意したのも10年前たたくさんの人たちの温かさに触れ、自分もそのような誰かの支えになれる人間になりたいと感じました。今は福島から上京し、東京で暮らしています。けれどもそんな私だからこそできる古里福島へのサポート・支援をこれからも続けていきたいと感じています。

高知住民の行動に学ぶ

Learning From the Actions of Kochi Residents

青砥 安彦 62歳 農家(矢野町)

私がふくしま復興大使として高知県と愛媛県を訪問したのは2015(平成27)年1月。その中で四十万十市の共同売店「大宮産業」で代表から聞いた話が現実味を増してきた。ここは過疎化で、保育所、学校が廃校となり、商店先が閉店。JA出張所も廃止され、住民生活に支障を来すことになった。そこで住民自ら立ち上がり、給油所併設の共同売店を立ち上げた。店主は全て住民で、住民による住民のための売店です。過疎化が進むからこそ、学ぶべき姿がここにありました。

真の復興へ責務果たす

Fulfilling my Duty for Genuine Reconstruction

井出 大雅 21歳 大学3年(いわき市、富岡町出身)

最初に、東日本大震災における日本全国ならびに世界各国からのさまざまなご支援、ご厚情に対して多大なる感謝の意を表しています。この10年を振り返ったとき、私の故郷である富岡町は東京電力福島第一原発事故の影響により警戒区域に指定された。そして10年がたちとうとしている中、行政・教育・商業・医療・インフラなどのハード面の復興がなされ、町に少しずつつながり、としがびがくようになってきた。10年という大きな節目を迎えるが、ここからは真の「復興」を遂行すべく自分らの責務を果たしていこうと思う。

福島応援の言葉に決意

A Decision Inspired by Words Cheering on Fukushima

吉田 幸子 63歳 主婦(石川町)

私は大切な古里である福島県が大好きです。この10年間で世界各国、県内外のご支援を頂きまして、誠にありがとうございます。私が強く印象に残っている出来事があります。それは私が直売所で買い物していた時に、県外から大型バスで越越しくださった中のお一人の方が「福島県っておいしいものがたくさんあるよね」と言って、私に笑顔で声を掛けてくださったのです。私は自分の心に入のぬくもりを感じてはいられませんでした。そして去り際に「私たちが、福島県を忘れない。応援しているからね」と言葉を残し、手を振って行かれました。人と人とのつながりでこころでよかったと思います。それは「私こそが感謝の心を決して忘れない」と決意した瞬間でした。

初孫の成長に喜び

Feeling Joy as my First Grandchild Grows

三瓶 弘次 68歳 団体役員(福島市)

東日本大震災が起きた翌年、東京に住む娘が「出産は福島で」と言っていました。当初は受け入れを躊躇(ちゅうちゅう)したもの、初孫はたましい産声を上げた。すくすく育った8歳児は「僕は福島で生まれたから福島っ子だよ」と喜ばせる。今はコロナ禍で帰省できないため、ふるさと産品を毎月送っているが、テレビ電話で時刻表を見ながら「今度はJR磐越東線、それからJR常磐線に乗って、岩沼から福島まで一緒に乗ろう」と計画しているようだ。

県花のように強く美しい福島を発信

Sharing Information About Fukushima, Which is as Strong and Beautiful as its Official Flower

須藤 楓 18歳 高校3年(いわき市)

今年で東日本大震災から10年となり、震災当時8歳だった私も18歳になりました。私は避難生活の中で、花から安らぎとパワーをもらい、花には人を安心させる力があるのだと感じ、筆道を始めました。福島県の県花であるネモトシヤクナグは高山という過酷な環境の中にあって、ひたむきに美しい花を咲かせています。これからも私は、ネモトシヤクナグのように、強く、美しい福島県を発信し、復興支援に尽力してくださった方々へ感謝を届けたいです。

県人会からの応援胸に

Remembering Support From Prefectural Associations

二瓶 隆一郎 19歳 大学1年(青森県、埴町出身)

私の出身地である埴町は東日本大震災により道路のひび割れや土砂災害、風評被害による農産物の売上減少などさまざまな影響がありました。しかし、現在では町の被害箇所を整備され、農産物の売り上げも上昇傾向を見せています。ふくしま復興大使としての活動などを通し、人と人とのつながる大切さを強く感じることができました。また、海外や国内の県人会の方々にはさまざまな活動を通して福島の文化や食文化、魅力を発信していただきたくてありがたかったです。今後は県人会の方々に応援を頂き、私もふくしま復興の復興に貢献できるよう努力していきます。

町の復興を見届け応援

Watching and Supporting Town Reconstruction

落合 紗代 13歳 中学2年(広野町)

広野町は活気が戻り明るくなったような気がします。2020年春、JR常磐線が全線開通し、再び特急列車が広野駅に止まるようになりました。東京や仙台への移動が楽になりました。人々の行き来が増え、県外の方たちとの交流が増えるのではないかと期待しています。夏は町おこし協力隊のたちが駅の東側にヒマワリのお路を作ってくださいました。町民の方々の笑顔や子どもたちのはしゃぐ声に触れ、私の心は自然と明るくなりました。私は町の復興を見届け、応援し、1人のふくしま復興大使としてできることを考えていきたいです。

伝統行事再開は支援のおかげ

Resuming a Traditional Event Thanks to Support From Others

鈴木 紘 17歳 高校2年(田村市)

10年前の東日本大震災により、田村市は郡路町が避難区域として指定されました。震災直後は伝統行事である灯まつりを開催できませんでした。が、県人会の皆さまをはじめ、たくさんの方々のご支援により再開することができました。これまでのご支援やご厚意があったからこそ、今の平穏な日々が戻ったのだと実感しています。昨年は新型コロナの影響により灯まつりは中止となりましたが、震災時の経験を生かし、新しい取り組みに挑戦していきたいです。

おかげで古里がほほ前の姿に

My Home Region has Been Mostly Restored Thanks to the Help We Received

宮尾 和佳奈 23歳 金融機関(神奈川県、白河市出身)

東日本大震災により白河市では大規模な土砂崩れや家屋被害、国指定文化財である小峰城の石垣崩落など、多くの被害がありました。もう10年、まだ10年、人によって感じ方は違いますが、変わらずにご支援をしてくださる方々のおかげで、白河市も復興に向け小峰城の崩落した箇所の復旧が完了するなど、ほぼ震災前の姿に戻っています。私自身、中学・高校・大学そして社会人と震災から10年の間さまざまな転機期を迎えてきましたが、未だに福島出身という「震災は大丈夫か」と聞かれます。大学から現在まで東京で過ごし、内からも外からも地元を見たからこそ、おいしい食べ物や豊かな自然に囲まれる福島の良いさをさらに感じる事ができました。将来は自分を育ててくれた地域に帰り、福島の魅力を発信するなどして「福島っていいところだね」と言ってもらえるような恩返しをしたいと考えています。

地域のため復興に携わる

Taking Part in Reconstruction for the Region

郷 平 19歳 大学1年(石川町)

ふくしま復興大使活動を通して、私の住む町は他の市町村より物理的被害が比較的少なかった一方、人々の中に被害があることに気づかれました。現在では、多くの方々や団体ののおかげで福島県全体の復興が進み、地元住民が元気を取り戻しています。福島県復興への希望が、地域住民を元気づけ、地域の復興につながっています。今後は、福島県や地域のために復興に携わっていきたくと改めて感じます。

周囲を気遣って生きる

Living With Consideration for Others

酒井 ヒトシ 71歳 体験スクール経営(伊達市)

定年退職後、夫の古里福島に来て、はや11年に数いました。私たちは東京で教員をしていましたので、不登校や引きこもりの児童生徒を数人か見てきました。退職後は体験スクールを建て、「自然・農業・生活」を体験できる場をつくりました。体験を通して元気を取り戻すことができるようにと願いを込めてつくりました。しかし、その後すぐ東日本大震災、東京電力福島第一原発事故があり、今まで経験したことの無い困難なこと、先の見えない大きな不安がありました。そんな折、何か自分ができることはないかと復興大使をやらせていただくことになりました。福島はまだまだ津波や放射能汚染の爪痕が残っています。しかし、皆さんがそれぞれの地域で一生懸命に生きています。今、またコロナ禍の中で収束の見えない不安を抱えることは自分も毎日送っていること、周りの人を気遣って生きること、健康都市・伊達市で小さな楽しみ方も見つながら生きていこうと思います。

思いやる心が未来につながる

Consideration Leads to a Bright Future

小豆畑 咲季 18歳 高校3年(石川町)

東日本大震災発生当時は小学2年生で、支援を受けるばかりだった私でしたが、人に気持ちを向け、一歩踏み出すことの大切さを、震災を通して学びました。今ではボランティア活動にも参加し、少しずつですが、周囲にも心が向けられるようになりました。震災で得た学びと受けた優しさは、いつも私の根拠にあり、一生の宝物となりました。現在、コロナ禍で世界中の人が大変な状況にあります。だからこそ、周囲を思いやる心を持つことが明るい未来につながるのだと思います。

福島の課題解決が目標

My Goal is to Solve Fukushima's Challenges

ババパリ 梓晴 19歳 大学1年(東京都、二本松市出身)

私は、福島県出身である。しかし、東日本大震災発生時はモロッコにいたため、震災の経験はない。しかし、3000人も速いところにいるにも関わらず、私にはまだ知らないことがたくさんある。私は2017年に福島県の高校に入学し、ふくしま復興大使に選ばれた。福島には数多くの課題が残されている。私は、ふくしま復興大使として、この課題を解決していくことが目標である。

支援を受けた事実を後世に

Telling Future Generations About the Help We've Received

緑川 衛 20歳 大学1年(東崎村)

東日本大震災から10年となり、発生当時小学4年生だった私も成人し、大学生になりました。私の地元である福島県東崎村は、震災以降着実に復興への道を歩んできましたが、いまだ震災と東京電力福島第一原発事故の爪痕が当時のまま残る地域もあるのが現状です。そのような状況下で今後生きる若者に求められている使命は、復興の力になるだけにとどまらず、当時の経験や教訓、そして国内外からさまざまな支援を受けたという事実を後世に伝えていくことなのだと感じています。

古里で震災経験を語り継ぎたい

Wanting to Share my Disaster Story in my Hometown

星 結衣 25歳 大学教員(東京都、須賀川市出身)

東日本大震災から10年。私の地元、須賀川市は震災6歳の基大な被害を受けました。国内外の温かい支援と市民の「食けてたまるか」の強い信念のもと、現在震災の痕跡を見つけることはできないほど復興しました。改めて国内外の皆さまの温かいご支援に厚く御礼を申し上げます。私は高校2年生時に復興大使の委嘱を受け、4県の知事に本県の状況を説明する機会を得ました。この訪問で各県の知事に励まされ、それが私にとっての力となっていました。大学に進学し入学当時は同級生から「福島県は大丈夫なの?」と聞かれました。2年時に同級生を福島県に招き、県内を案内すると、震災の痕跡を見つけることができず、ほど強く復興した福島県に驚いていました。この光景を1人でも多くの方に発信したいと心の变化がありました。現在、私は大学で教える機会を得ました。私はいつの日か福島県に戻り、教育の場で震災経験を語り継ぎたいと伝え、将来を担う子どもたちの希望への虹の懸け橋になりたいと決意しています。

1人の県民として深く感謝

Profound Gratitude as One Resident of Fukushima

我妻 史人 21歳 大学3年(郡山市)

2011(平成23)年の東日本大震災発生から、10年の月日がたとうとしています。実感がありません。本当にあった1年間でした。世界中から支援・応援の動きがありました。おそらく、私が想像しているよりも多くの方々が、私たちのことを思ってくれているのだと思います。その方たちの支えがなければ、きっと今の私たちは、そして福島県は存在していません。1人の福島県民として、深く感謝しています。復興という花を咲かせるため、引き続き、私にできることをしていきたいと思っています。

地域創生を学び恩返し

Learning About Regional Revitalization and Repaying Kindness

吉田 智美 18歳 高校3年(広野町)

私は小学2年生で東日本大震災を経験し、現在高校3年生になりました。震災当時として今も福島を気に掛けている人がいるというのはとても心強く、感謝しきれないくらいです。そして、私はこの10年間を通して復興に携わってくださった皆さんへの感謝を受け、自分も困っている地域を助けたいと思い、大学で地域創生を学ぶ予定です。今後は皆さんへの恩返しができるように頑張っていきたいです。

福島の日常を取り戻してくれて感謝

Thank You for Helping Restore Normal Life in Fukushima

高橋 晃樹 21歳 大学3年(新潟県、西会津町出身)

「日常」。それは誰もが保てるべき日常。しかしその一方で、いつ奪われるかわからない、はかない、そして不確かなもの。2011(平成23)年、福島の日常が奪われたあの日から10年。日常はまた私たちがものになったのだろうか。備え立つ堤防、新設の伝承館、そして、美しい自然にのびる食べ物。日常の形は変わってけれど、そこには確かに変わらぬ笑顔がある。希望がある。福島で生きる誇りがある。全とはあの日から、みんなが守ってくれたから。みんなが守ってくれたから。今、福島に生きる人として、世界に感謝を伝えたい。ふくしまの日常を取り戻してくれて、本当に、本当にありがとうございます。

福島の元気な姿発信したい

I Want to Convey Fukushima's Vitality

藤井 万佑子 16歳 高校1年(小野町)

東日本大震災から10年となり、福島は復興は徐々に進んでいます。震災発生時にはまだ6歳だった私は今になって知る震災の事実も多くなりました。単に復興といってもそう簡単なものではないと感じています。多くの人が福島のためにそして私たち県民のために復興に力を注いでいることに本当に感謝しています。これから、私も復興を前進させる1人として福島県を支えていきたいと考えています。そして、福島の元気を国内にとどまらず、世界に発信していけたら良いと思います。

「分断」の経験伝え恩返しの時

A Time to Convey Our Experience of Division and Repay Kindness

藤田 浩志 41歳 農家(郡山市)

「おい!おい!」。今、私の農産物を食べてそう言ってくる人がいる。この10年、放射能物質というよりは不安、恐怖、疑念などによりもたらされた「分断」との闘いであった。そこからの「ご縁の結ば直し」を続けてこれたのは、日本中・世界中の人たちの支えのおかげだった。今コロナにより世界が分断にさらされている。分断を乗り越えてきた経験を伝え恩返しの時は今ではないか、そう思いながら、私は今も福島の農に生きています。

桃の変わらぬみずみずしさ

The Unchanging Juiciness of a Peach

鈴木 結衣 28歳 大学院1年(山形県)

私はこの10年間で、国内外の多くの方々を支えられながら、Fukushimaという美しさ、豊かさがいっつも日本にあっけい、という思いをさらに強く、抱くようになりました。毎年、福島に住む親戚から桃を頂くのですが、東日本大震災があった後も桃が届け、変わらぬみずみずしい甘さが体に染み渡りました。福島という土地だからこそ、福島に暮らす人々だからこそつくることができる、お金では買えないことのない味わいがあるのだと心から感じています。絶えない復興、エールを送ってくださる方々、心より感謝申し上げます。

古里発展は援助のおかげ

Assistance has Further Developed my Hometown

津金 大勢 20歳 大学2年(鶴石町)

東日本大震災発生当時小学5年生だった私は下校中に未曾有の地震に見舞われ、近所の公園の遊具が沈んだり、コンクリートが割れていたりした様子を見た。発生から何週間かは水道が使えない日が続き、日頃の当たり前の生活が壊れた。震災から10年がたち私の古里鶴石町は大きな被害・損壊から回復し、また福島県の中で2番目に人口密度が高い市町村としての、この10年間で人口増加するほどの発展もしてきた。福島県民が協力し合い、またさまざまな援助・支援があったからこそ復興・発展ができたと思う。これらのことを忘れず後世に伝えていきたい。

ありがとうを伝えたい

Wanting to Say "Thank you"

網本 笑子 60歳 契約社員(川俣町)

川俣町は、原子力災害により山木屋地区が避難指示区域になり避難を余儀なくされましたが、復興拠点商業施設として「どんやの郷」もオープンしました。川俣町では国内最大規模の中南米音楽祭「コスキン・エン・ハボン」が開かれています。東日本大震災が起きた年もボリビアのプロの演奏グループを迎え、盛大に開催できました。またその縁でアルゼンチンから義援金に寄せられました。この二つのことは大きな心の支えになりました。震災後から言葉としてくださった皆さんにありがとうございます。この支えを伝えたいと思います。

子どもの瞳に感じる明るい未来

Seeing a Bright Future in the Eyes of Children

根本 翼 22歳 小学校教員(本宮市、白河市出身)

福島は今日も「元気」です。東日本大震災から10年。福島は、粘り強く復興に向け努力し続けています。初代復興大使として任命された私は学生時代を福島で過ごし、福島の人たちが「そして今努力する様子を見てきました。そして今年度社会人となり、ここ福島で小学校教師となりました。日々子どもたちと過ごす中で、子どもたちの輝く瞳に明るい未来を感じています。今まで私たちが支えてくださっている方々、また福島を気に留め、国内外から温かく支援にご協力してくださっている方々への感謝の気持ちだけは決して忘れず、後世に伝えていかねばなりません。子どもたちと明るく元気な福島をつないでいくことは復興のそうした方々への恩返しであり、また復興大使としての使命だと思っています。「希望の先に光はある」で生きる私は走り続け、福島復興への心意気のたすきをつないでいきます。

経験をたくさんの人に伝える

Sharing my Experiences With Many People

佐藤 彩花 18歳 大学1年(三重県、国町出身)

私は中学2年生の時から、ふくしま復興大使として活動させていたと思います。当時、復興の現状を知ることの重要性に気が付いていませんでした。しかし、大学生となり福島を離れ、震災のことについて質問されることが多くあり、震災や復興大使の体験が貴重であることが身に染みしました。福島について知る機会を得たことに感謝しています。これから、自分がこの場で得た経験をたくさんの人に伝えていきたいです。

福島の明るい未来へ盛り上げ

Bringing Energy to Fukushima for a Bright Future

高野 龍晴 16歳 高校1年(福島市、飯坂村出身)

福島を支援してください。あるいはしてくださった皆さん、県民代表としてここで感謝いたします。福島の現状については、完全に復興、つまり普通の日常を取り戻したとは正直言えません。原発の課題はまだ残っています。美しい自然は一部が変わり果てたままです。しかしこの10年で福島は確実に復興を進めています。海岸防壁には防波堤が造られました。除染作業は計画の多くが終了しました。これらは全て支援してくださった皆さんのおかげです。福島の未来は明るいです。これからも共に福島を盛り上げてまいります。

未来のため福島の魅力発信

Promoting Fukushima for the Future

藤井 温子 22歳 会社員(小野町)

2011.3.11。あの時のことは今でも忘れない。ものすごい揺れと恐怖が心をいっぱいにした。地震後、私の地域は断水が続いた後、地面にヒビが割れた。また、水素爆発を起こした東京電力福島第一原発からそう遠くはなく不安な日々を過ごした。しかし、あの恐ろしい出来事からもう10年が過ぎる。徐々に復興してきたと思うが、原発近くはまだ不安である。私にできること、それは福島の魅力を多くの人に伝えることだ。これからは復興のため輝く福島の未来のために魅力を発信していきたい。